

談話室/事務局からのお知らせ

より指向される。製鋼システムの一環としての分析システムを考えると、こうした背景に呼応したシステムの構築が当然要求される。それには、不純物元素の ppm オーダーから 50～80% の高含有率元素までの高精度分析、あるいは形態分析を今以上に迅速に自動定量する必要がある。特殊鋼メーカーは一貫製鉄所に比べ多くの品種を生産しており、それが試料調製、分析方法などの多様性を招き分析の自動化を阻害している要因とも言われているが、昨今のメカトロ技術の目覚ましい発展を考えると、

無人分析システムは決して夢ではない。また、一般に蛍光 X 線、発光分光分析で適用できない、試料形態、元素、含有率の試料については化学分析で実施されているが、この面での自動化も是非積極的に実施していくアイテムと考える。

我々の究極的な望みは、溶鋼の直接分析による精錬工程でのダイナミックな制御である。21 世紀への課題として、一歩でも二歩でも実用化のための地道な研究を続けて欲しい。分析技術者の旺盛な研究心を期待する。

事務局からのお知らせ

「鉄と鋼」投稿規程改訂のお知らせ

●「技術報告」の廃止と「現場技術報告」の創設●

平成 3 年 10 月 1 日より実施

編集委員会では、現場技術者にも魅力ある「鉄と鋼」を目指して、内容の充実を検討しております。その一つとして従来の「技術報告」を廃止し、新たに「現場技術報告」を投稿区分に加えることになりました。

「現場技術報告」は、現場における技術の新しい試みなど、すなわち、効率化、コスト低減、省エネルギーなどに効果のある結果についての報告です。（具体例は、後に示します。）講演大会で実際に講演をする時に用いる程度の図表をまとめたくらいの分量と内容でよいと思います。記事の長さは本会所定のオフセット用紙 2 枚以上、4 枚までと致します。詳細は“投稿規程補足（現場技術報告）”をご覧ください。（N636 ページ掲載）

投稿後 3 か月前後で掲載されるようになりますので、現場技術者の方々をはじめ、会員各位には奮って投稿されるようお願い致します。（なお、「現場技術報告」として投稿した内容を「論文」としてまとめ直して再度ご投稿下さっても結構です。）

「現場技術報告」記事の内容例

- 1) 現場設備の老朽更新と増強
- 2) 設備（耐火物を含む）の寿命、耐久性、診断技術
- 3) 新設備、新技術の導入と結果
- 4) 無人化、省力化
- 5) 環境、省エネルギー対策
- 6) 製造及び製品利用工程における改善対策（品質、効率、耐久性、操業、歩留りなど）
- 7) 上記改善のための操業管理基準、原料品質管理基準の見直し
- 8) 物流システムの開発、改善
- 9) 工程、製品管理システムの開発、改善（AI、ニューラルネットなども含む）
- 10) 既発表研究成果（分析・計測の方法・機器、設備、プロセス）の現場適用結果
 <研究結果が未発表であれば、合わせて論文とされることを推奨>
- 11) 現場規模の各種試験結果（通常の原料、操業条件とは大きく隔たった特殊操業も含む）
- 12) 新設備、新プロセス、新製品及びその利用技術開発（商業的宣伝にならないもの）
 <論文として投稿可能な内容は論文として投稿されることを推奨。理論あるいは実験結果による裏付けがなく、単なる思いつき（発想）で生まれた新技術の成功例でも可>